

司書の協力による国語の授業実践

所属校名[大津町立大津北中学校]

氏名[古澤 理恵(司書) 村山 和美(教諭)]

単元名 「日本文化の再発見！日本文化のガイドブックを作ろう」

～目的や相手に応じて材料を取捨選択し、文章の形態を選択して書く～

(「編集して伝えよう『日本文化』のガイドブック」東京書籍「新しい国語3」)

(1) 授業の実際

本単元は、ガイドブックを作ることを通して、目的や相手に応じて材料を取捨選択し、記事の内容や形式を工夫して書く力を育むことを目指して取り組んだ。まず、相手意識、目的意識を明確に持ち意欲的に取り組むことができるように、場の設定を工夫した。具体的には、単元を貫く言語活動を「ウズベキスタンで日本語を学んでいる子どもたちに日本文化を紹介するガイドブックを作ろう」とし、「単元の導入」において、実際に海外青年協力隊としてウズベキスタンで働いている方から、現地の子どもたちに日本文化を教えてほしいと依頼されたということ伝えた。(この方は本校の司書の友人である。完成したガイドブックは現地に送り感想をもらう予定である。)この時、授業者が作成したガイドブックの作品例を提示し、学習者

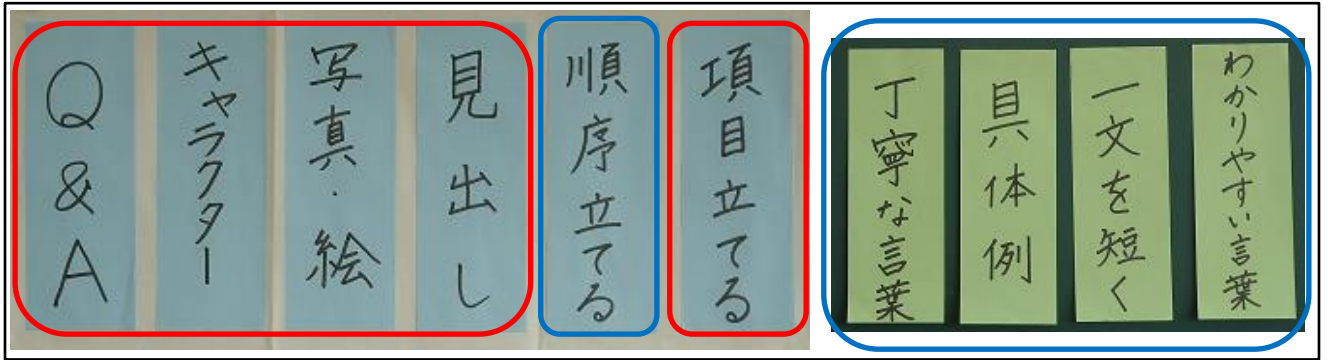
【資料1】ガイドシート

<p>目的</p> <p>二枚のガイドブックを比べて、気づいたことを出し合う中で、ガイドブック作りのポイントを見出す。</p>	<p>準備</p> <p>二枚のガイドブックを比較して、気づいたことを出し合う中で、ガイドブック作りのポイントを見出す。</p>	<p>活動のねらい</p> <p>二枚のガイドブックを比較して、気づいたことを出し合う中で、ガイドブック作りのポイントを見出す。</p>	<p>先生からのメッセージ</p> <p>二枚のガイドブックを比較して、気づいたことを出し合う中で、ガイドブック作りのポイントを見出す。</p>
---	--	--	--

にゴールを明確に持たせるようにした。また、【資料1】に示す「ガイドシート」を配布し、単元目標やつけたい力、毎時の学習内容を確認し、見通しを持って取り組むことができるようにした。さらに、毎時間の終末には振り返りを行い、自らの言葉で学んだことを記述させることで学びの自覚化を促すようにした。

第1時では、大津町を紹介した2つのガイドブック（観光協会に許可をもらい、ワークシートを作成し配布した）を比較し、気づいたことを出し合う中で、【資料2】に示す「ガイドブック作りのポイント」について学習者の側から引き出していった。ここで引き出したのが【資料2】赤囲み部分である。これらは「推敲段階」で推敲の視点ともなるものである。教師が一方的に与えるのではなく、学習者とともに見出していくことで自覚化を促した。

【資料2】ガイドブック作りのポイント



第2時では、グループのテーマと個人の題材を決め、調べ学習を行った。各クラス、4～5人の9つのグループを作り、「季節の行事（春・夏）」「季節の行事（秋・冬）」「生活」「学校」「スポーツ」「伝統芸能」「食事」「遊び」「方言（言葉）」の中から各グループのテーマを選択し、個人の題材を決定していった。学習者の意欲を持続させるためには個人でテーマを決めさせるべきではあったが、調べ学習を短時間で有効に進めるために今回はテーマを絞り、グループごとに決めさせるようにした。調べ学習では、図書館司書の協力を得て、各班8～10冊の本を用意した。

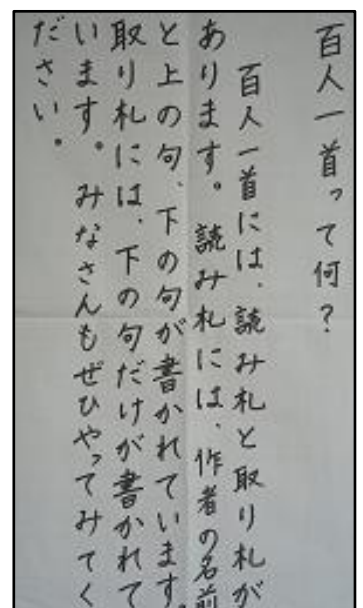
司書の協力について

依頼を伺い、本を探して提供し、授業者と授業についてコミュニケーションを取っている段階で、「実際に海外の子どもたちにガイドブックを送ったらどうだろう」というアイデアが生まれた。地域に海外で働いている方がおり、繋げることで、よりリアリティのある題材となり、生徒のモチベーションアップに繋がったのではないかと感じている。実際に本を使って調べている時間に授業を見学させていただいたが、生徒たちは熱心に内容を調べていた。出来上がったガイドブックを製本し、ウズベキスタンへ送った。あちらで活用された報告もいただく予定で、生徒たちへどのように活用されたかお知らせできることも楽しみにしている。本の選書の際は学校図書館では本が足りず、地元の公共図書館の資料を活用した。また、授業での使用前に授業者によるチェックを行っていただいたことで、より精度の高い資料を提供できたのは大変ありがたかったと感じている。

第3時では、記事の書き方を学び、ガイドブックの下書きを行った。まず、同じテーマについて書いた2つの記事を提示し、それらを比較しながら読み手に興味をもってもらえる方の記事を選択し、理由を出し合う中で【資料2】青囲み部分を見出していった。その後、調べたことをもとに各自で下書きを行った。

第4時では、各自の下書きが、読み手に興味を持ってもらえる「ガイドブック」になるように、第1時や3時で学習者とともに見出した「ガイドブック作りのポイント」をもとにグループで推敲していった。まず、導入で、推敲の視点の自覚化を促すために【資料3】に示すモデル文をもとに、全体で推敲していった。ここでは、学習者の下書きの実態から「ガイドブック作りのポイント」の中の「わかりやすい言葉」を使うことを特に意識させるようにした。また、「質問の具体例」を提示し、どのような時にどのような質問や意見を出せばいいのか確認した。その後、グループごとに1人分ずつの記事を「対話」を通して推敲していった。その後、各自で推敲

【資料3】モデル文



し、赤ペンで書き足しや書きかえをしていった。実際に学習者が書き足しや書きかえをしていたのは【資料4】に示すことである。

【資料4】

- ・わかりやすい言葉への書きかえ
- ・構成の見直し（記事の入れ替え）
- ・見出しの工夫
- ・説明の追加・削除・統合
- ・絵や写真の挿入
- ・ふりがな
- ・誤字脱字 など

【資料5】 グループでの協働推敲

さらに、グループでの話し合いの際には、【資料5】に示すように、調べ学習で使った本と国語辞典を手元に置かせ、常に調べたり振り返ったりすることができるようにした。4時を行ったのが夏休みに入る週だったため、清書は夏休みの宿題としている。夏休み明けに、クラスごとに1冊の本にまとめたガイドブックを評価し合い、ウズベキスタンに送り、現地の子ども達から感想をもらう予定である。



(2) 振り返り

本実践では教師が「ガイドブック作りのポイント」を提示するのではなく、2枚のガイドブックを比較する活動（第1時）や2つの記事を比較する活動（第3時）を通して「ガイドブック作りのポイント」を学習者の側から学習者の言葉で引き出していった。また、毎時間学んだことを自らの言葉で記述させ、振り返らせていった。これらのことによって、「ガイドブック作りのポイント」の自覚化が促され、下書き段階でそれぞれの題材に応じた記事を書くことができた。さらに、推敲場面ではそれらが「推敲の視点」となり、導入で視点を振り返ったり協働推敲を行ったりしたことで、推敲の視点の自覚化が促されたと考える。第4時のガイドシートには【資料6】に示す振り返りが書かれていた。

【資料6】 第4時の振り返り

() は授業者によって加筆

- ・難しい言葉があったり見出しをもっと工夫した方がいいという意見が出たので、清書の時はもっと簡単な言葉に変えたりしたいです。
- ・題名（見出し）が普通だから、もっとおもしろくて、読み手をひきつけるような題にしたい。
- ・漢字の読み方がわからないのではという指摘があった。イラストの説明が足りなかった。「四」がなぜ不吉なのか？また、不吉とは何か？（日本では「四」は不吉な言葉とされることが多いが、その理由を説明していないのでウズベキスタンの人にはわからないという指摘を受けて気づき生まれた。）
- ・同じような内容を2つ書いていたので、「歴史」「知ろう」のところをまとめて、2つめの「元歴史」のコーナーだったところにスポーツのルールについて書こうと思いました。（内容の重なりについて指摘を受け、気づきが生まれている）

これらのことから「対話」によって書き手である学習者に気づきが生まれていることが明らかとなった。このように、推敲場面では、「他者」から質問や指摘を受け、自己内対話を繰り返すことで自分一人では気づかなかった気づきが生まれたのである。

しかし、課題も明らかになった。第3時に各自の題材をもとに調べ学習を行った。選書に関しては、常勤の司書の協力によって個々の学習者に必要な本を十分に提供することができた。事前の準備だけでなく、実際に調べ学習を行う時間にも司書に授業に入ってもらうべきであった。自分の題材が決まり、本を手にとって眺めてはいるが、どのような情報を取り出すのかというところで悩んでいる学習者も見受けられたため、授業においても本のプロである司書との連携が必要であったと感じている。

また、3年生は授業時間が週に3時間となっている。時間がない中で、調べ学習の時間をいかに確保するのかということも今後の課題である。本実践では、授業時間が確保できなかったため、各自で時間を見つけて調べ学習を行っていた。司書によって同時期に図書館に特設の「日本文化コーナー」が設置された。様々なテーマの本は、各自の調べ学習に使われなくても、新たな日本文化に触れる機会となるはずである。今後も司書と連携を図りながら、本に興味を持ち自ら積極的に調べようとする力を子どもたちに育てていきたい。

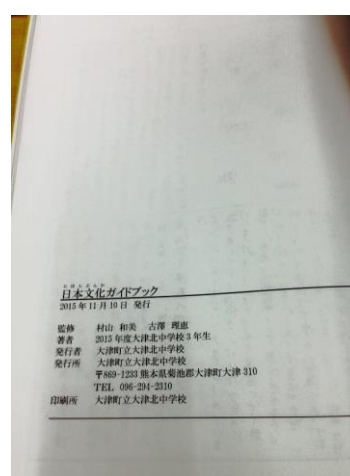
【作成したガイドブック】



表紙



目次



奥付